

St. Luke's International University Repository

人間発達学序説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡堂, 哲雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/58

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



人間発達学序説

岡 堂 哲 雄

I 児童発達から人間発達へ

人は(受胎→)誕生から死までの生涯のあいだ、さまざまに変化していく。人間発達学は、このような人間の変容過程を研究対象とし、そこに遍在する法則性を発見しようとする科学である。従来、人間発達の研究は、進化論的な立場からのアプローチか、さもなければ生れてから成人になるまでの児童期の発達研究のことを意味していた。つまり、人が社会的に成人となるまでの過程が、考察の主要な関心であった。子どもをどのように教育し、その集団の一員としていかに社会化していくかを考えるために、児童期および青年期の精神発達が強調されたのである。19世紀から20世紀の間ばまでの間は、多くの研究者が児童・青年研究に没頭し、みのり豊かな業績が積み重ねられた。とくに、臨床心理学的な諸研究は、児童発達に関する諸領域の成果を統合する形をとって進展してきたのである。たとえば、学習に及ぼす賞罰の効果にしても、子どもの精神的健康を配慮しなければならぬし、単なる動物実験の成果を応用することでよしとすることはできなくなったわけである。

このような人生初期の発達に関する研究が進められるうちに、青年期およびそれ以後の生涯においても人間は発達するものだという見方が導入され始めた。なるほど身体の大きさなどは、青年期までにその人らしい身長になるし、高齢化とともに身体的機能はおとろえる。だから、成人期以後

は発達と呼ぶべきではないという見方もありうるだろう。しかし、人間をして人間らしくしているのは、その人の精神的社会的生活(psychosocial life)のあり方であって、この人間性を支える中核的機能(パーソナリティ)は青年期を経過しても停滞せず、いっそう拡大し、一段と深められ、円熟の境地へと発達していくと見るべきであろう。

成人してからの人生後期に関する研究は、老年期のそれを除くと未だ十分になされているとはいえない。しかし、人の生涯を見通して、その精神発達を把握することができれば、世代から世代へと継承される文化、価値、信仰など人間生活を豊かに彩る特性の連続的な理解が可能になるはずである。親から子へ、子から孫へと伝えられるものを、精神史的過程(psychohistorical process)において把えなおすことで、人間の歴史をさらに深く考えることができるだろう。

児童発達から人間発達へと視座を拡大させることに力のあった、もう一つの条件は、社会教育の領域において高まってきた生涯教育に対する要請である。近年、工業化社会がその頂点にさしかかるとともに、科学的機器の進歩は著しく、職業的達成のためには学校教育における学習だけでは不十分になってきている。また、いわゆる専門職の領域においては、従来からの卒後教育を一歩すすめて、いっそう高度の教育に対する要求があらわれ始めている。

このような教育の拡大と延長に対する要求に対

応するためには、単に政治経済的な研究だけでは十分といえず、人間の精神的健康に関する研究もまたいっそう重要なテーマになってきた。

成人期の人間発達上の課題は何か、精神的危機はどのようにして訪れるか、特有の人間的強さは何か、どのような学習がもっとも望ましいかなど、取り組まらるべき問題は非常に多い。わが国においては、高年齢層の精神的健康についてよりも、いわゆる成人期のそれに関する著書、論文は稀にしかみられない。(アメリカでは、1969年に、L. J. BischofがAdult Psychologyを書き、一つ先の鞭をつけているが)。

かくて、成人期を含めることによって、人間が生まれ、そして死にいたる生涯を、全般的に見通すことが可能になるような発達学が求められることになった。本稿のねらいは、人間発達の諸問題について、これまでの理論を吟味し、この方面の将来の研究のための枠組となるような仮説を導くことにある。

II 発達心理学から人間発達学へ

心理学は主として人間性の理解を目ざす科学であり、その一分科としての発達心理学の目標は人生の各段階にみられる人間行動にかかわる心理的諸過程と力動性を理解し、可能な限り予測し、統御しようとするところにある。発達心理学的研究は、有機体としての人間の成長 (growth, das Wachstum) と成熟 (maturity, die Reife) およびその認知的、情動的な特徴、さらにはパーソナリティ構造をも対象とする。人間の発達 (development, die Entwicklung) にかかわる諸要因—とくに何が

発達を促進させ、何がそれを停滞させるか—および個体と環境の相互作用のあり方についても、慎重に研究されるべきである。発達心理学は、当然、乳幼児、青少年、成人となっていく過程のすべてを問題にしなければならないが、これまでは人生後半についての比重が軽かったといえる。

人間の受胎から死までのあるがままの姿を研究しようとするが、人間発達学においては人間を生物の種として取扱うのではなく、人間が環境との関連において成長していく方向性と力動性を重視することで把握しようとする。人間が自分自身およびその環境についていっそう十分に理解できるように、パーソナリティの段階的変容にみられる法則性を発見することが、人間発達学の主な関心になると考える。

人間発達の時間的順序や秩序が科学的に解明されるならば、自分の心理的悩みやモチベーションをいっそうよく理解できるようになるだろうし、将来に向けて備えることもできるだろう。このような目的のためには、人間の生涯の各段階における成長や行動のしくみを科学的に説明しうるような、体系的で論理的な観察とその記述がなされねばならない。前節で述べたように、従来の発達心理学では、児童期、青年期などの人生初期に大きな関心がはらわれている。それは人生初期がその後半に大きな影響を及ぼすためであったが、人生後期の重要性を無視してはならないのである。

最近、生物学的、行動科学的研究成果にもとづいて形成され始めた人間発達学は、いわば学際的科学の一つであるが、発達心理学が重要な役割をになうべきことは、以上述べてきたところから当然といえるだろう。人間発達学に対する基礎的な

寄与は、心理学と生物学の領域からの研究といえるが、社会学、教育学、小児科学、精神医学、人類学および公衆衛生学もまた密接に関連していると見なければならない。

人間発達の諸現象を体系的に分析する枠組には種々あるが、発達心理学的な流れに沿ったものとしては、特定課題領域における発達を研究する方法と発達段階ごとに包括的に発達を見ていこうとする考え方とがある。

前者の例としては、たとえば人間の知的能力はその萌芽が児童初期にみられ、児童期を通して機能し始め、青年期にほぼ完成し、成人期にはそれが充実し、その後半から老年期になるにつれて減退していくというように、特定のテーマを確定して、発達の变化を明かにしようとする立場である。この立場から研究するとき重要になるのは、多くの数量的研究を行い、発達上の基準を見出し、それを応用しようとする企てである。たしかに、10歳の年令集団の知的能力の平均や分布に関する知識は、教師や親、あるいは児童福祉にかかわる人びとにとって必要であり、求められている。しかし、このような特定の集団標準を直ちに、個人にあてはめようとするのは、非常に危険であることもまた、周知の事実である。

さらに、構造や器官がちがえば、成長の速度は異なり、能力や特性が異なるとその発達は等しくないことの方が多い。たとえば、言語能力がすぐれている3歳児であっても、友だちとうまく交わることができないことがあるように、である。このように、個人差あるいは個体内の機能差がありうることを認識して助言しなければ、親に不安や心配の種を与えるようなものである。

研究上留意すべきことだが、人間は単に知的存在、情的生物あるいは社会的存在として別べつに切り離されたものではなく、すべての機能を統合した存在であるということである。たとえば、知的能力であっても、情意機能との関連が強く、能力以上のはたらきを示すオーバーアチバー(over-achiever)になることもあるし、十分に機能しえないアンダーアチバー(under-achiever)になることもあるからである。このように、人間の特定の機能や構造は、他のそれらと相互関連的で、統一体として存在しているのであるから、他から切り離してひとつの機能や構造だけを見ることは全体としての人間を見失うことになりかねないわけである。それゆえに、人間の特定領域の発達における連続性を明かにする目的のときであっても、人間発達学的視座に立って他の関連領域を合せて見ていくことが求められる。

III 基本的概念の検討

ここで、人間発達学を構成する基本的な概念について考えることにしよう。先ず、発達ということばであるが、この語は個人の潜在能力が顕在化し、新しい能力、特徴として現われる過程を表している。発達には、成長、成熟、学習および達成によって生ずる比較的永続的な変化の過程が含まれる。

成長は、おもに身体の組織、器官、構造および系統の増分のことをいう。もっとも、人間的成長という慣用句には、さらに進んだ精神的発達が含まれているが、通常成長といえば身体的な側面を強調することになる。

成熟とは、身体の構造や機能が期待される最も充実した状態になっていくことである。それは、身体の構造と機能が分化していく過程でもある。たとえば、幼児の歩行には、それにふさわしい身体成熟に達していることによって訓練が効果的になる。成熟の程度が、学習効率の必要条件といえることができる。さらに、学習は、身体成熟に伴う準備性に加えて、適時に十分な社会的刺激が与えられ、また連続的な努力が試みられなければ達成されにくいのである。

ところで、包括的な概念としての発達には、有機体としての人間がいつそう高度の分化や複雑さ、あるいは機能の効率を獲得していく過程に加えて、人生後期にみられる有機体の構造と機能の減退が含まれる。人間の生涯は、その人の作用―反作用の力動性を逆転することを許さないし、むしろ構造と機能の統合への過程として把握さるべきであろう。身体の組織、器官、系統の効率減退は、加齢または病理による機能低下でもある。

加齢現象は、受胎に始まり、死をもって終結する過程である。高年齢になって生ずる身体的老化に対して、精神的発達は円熟の境地へとたどりつくことを、人びとは期待している。つまり、人間の精神は高年齢になるまで発達可能性を秘めており、古老の英知を達成するのが目標となる。しかし、多くの老人がそのように頂点をきわめるとはいえず、過去経験や常同的習慣に執着したり、あるいは弱った身体に異常な関心を示すことで自己中心的となる場合が少なくない。精神的能力が著しく減退し、良心や自我理想あるいは衝動制御力を喪失することによって、さらに新生児のような口唇愛的の受動的な生き方をするようになることも

稀ではない。それにも抱らず、人間発達の最終目標として、円熟の概念を定位し、高年齢層の発達の問題を研究することが、人間中心の視座に立てば、望まれるわけである。

以上の基本的な術語に加えて、人間発達の過程を明瞭化し、説明する一般的原則について、これまで述べたことがらを含む諸研究をもとに主なものを、次に列挙してみよう。

- ① 身体的成長は、発生的継起に従う。
- ② 構造と機能は、独特の速度と段階をもつ。
- ③ 能力の顕在化は、随意に現われる。
- ④ 行動は人間の欲求によって制御され、発達水準によって限定される。
- ⑤ 人間発達は連続的だが、いつも等速とはいえない（段階的である）。
- ⑥ 成長と行動の可能性は、予測することができる。
- ⑦ 人間は、まとまりのある全体として発達する。
- ⑧ 人間発達には個人差がある。

これらの一般的原則のなかで、最も重視しなければならないのは、人間発達における段階論である。一定の年齢群には、一定の発達水準が認められるし、その時期に特徴的な人生的な主題と危機が内包されている。したがって、次節では発達段階に関する考察を試みよう。

IV 人間発達段階論の位置づけ

人間発達学を明確に定式化するには、人間発達段階論的アプローチを重視しなければならない。人間の一生は決して平板に、直線的に経過するこ

とはなく、機能や構造の特徴によっていくつかの年齢群を区別することができる。各発達段階における人間の能力や行動を包括的に理解しようとするのが、人間発達段階論の基本的姿勢である。たとえば、青年期においては、どのような欲求や動機が強くなり、何を達成する能力が現われ、問題解決がどのように進みやすいかなどを問い、それらを統合的にとらえ、全体としての青年を理解しようとする。言いかえると、所与の発達段階において、どのような成長や行動変化が共通しているかを確かめることが、ことのほか重要になる。

たとえば、生理的变化が決定的に重要なのは、胎児期、新生児期および思春期であろうが、児童期や成人初期にはそれほど決定的な重みがあるとはいえないだろう。発達段階毎に、どの機能が前面に出てき、その時期の人間行動の力動性に影響を及ぼすかを研究することによって、人間をトータルに把握することが、可能になる。知的能力の発達の变化とか社会性の形成とかの個別課題は、それぞれ学習心理学、あるいは社会心理学において取り扱ってもよいだろう。しかし、人間の一生を連続して理解することを目指す人間発達学にとっては、発達段階論こそユニークなアプローチとすることができる。

さて、人間の生涯をいくつかの段階に区切る場合に、若干の問題がある。たとえば、どこで区切りを与えるかは、人間の発達が連続的である故に、困難な課題である。また、ある発達段階を特徴づける標準をどうするかという難問もある。エール大学医学部精神医学教授セオドア・リッツ(Theodore Lidz 1968)は、発達段階を特徴づける相互関連的な要因として、次の5要因を挙げている。

- ① 身体的条件の変化(成熟と減弱)。
- ② 社会が期待する役割
- ③ 時間の経過
- ④ 認知機能の充実と減退
- ⑤ 自己を方向づけ、制御する能力の変化

これらの諸要因に加えて、発達段階を考える場合に、発達の危機の概念を導入することができる。たとえば、子どもが学齢に達したならば、母親や家族から分離して、学校に行かなければならない。子どもにとって、保護環境としての家庭からの出立は、精神的な危機である。それを克服しうる準備性(readiness)、適時性(timing)および連続性(continuity)があれば、すべての子どもが経験する危機をのりこえて進んでいくことができる。しかし、母子関係に問題があるときには、安全を確保しようとして、母親に対する幼児的な執着が生じ、登校することができなくなる。いわゆる固着が生じよう。また、かりに登校できた場合でも、そこで耐えられないほどのストレスに会うと、学校に通うのをやめ、家庭にとどまろうとする子どもがいる。この現象は、ふつう退行といわれる。要するに、人間発達には、前進(progression)、固着(fixation)および退行(regression)の諸現象がみられることから、いくつかの段階分けがなされなければならないことになるわけである。

かくて、リッツは人間の生涯を、8段階に分けている。彼は、フロイト、エリクソンおよびピアジェの人間発達論をもとにしていると述べているが、エリクソン(E. H. Erikson)の理論が中心的な位置を占めていることは明かである。

また、最近「パーソナリティの成長——幼児から老年まで」(1972年)を出版したカナダのク

ーンズ大学の精神医学心理学部の助教授ロウ (G. R. Lowe) は、リッツと同様に、主としてエリクソン理論を踏襲したかたちで、人間発達学をまとめ挙げている。次節では、人間発達学において卓越した貢献により大きな影響を与えてきたエリクソン理論についてふれることにしよう。

V 漸成的人間発達理論

エリク・エリクソンは、フロイトの精神分析理論を発展させ、アイデンティティ (identity) の概念を中心に独自の自我発達の理論を構築してきた臨床家である。彼は自分の理論についてフロイト理論を今日の時代精神と知識とによって拡大したにすぎないと述べているが、実際には新しいユニークな学説として評価されている。エリクソンの人間発達についての見方は、フロイトのそれに比してつぎの3点で大きく相違している (H. W. Maier, 1965, pp. 16-18)。第一に、イド (本能) よりむしろ自我を重視していることが挙げられる。自分についての意味や表象、自分にとって重要な他者やその象徴的代替者の意味や表象などの安定した発達にかかわる自我の「統合機能」が、研究の焦点になっている。エリクソンは、自我と社会との関連について深い関心を示し、フロイトの精神性欲的 (リビドー的) 発達段階をこえて自我機能にかかわる経験の連続性に注目したのである。すなわち、彼は本能衝動論についてはあまり関心をはらわず、人間が所与の社会文化的状況のなかでいかに生活していくかの「現実関係」を重くみ、人間の社会化の過程を理論づけたといえる。

エリクソン理論の第二の特徴は、自我の発達に

おける歴史的現実性を強調したところにある。フロイトが父母子の三者関係を個人内力学の角度から重視したのに対して、エリクソンは家族構成員とその社会文化的現実との関係における力学をいっそう重くみている。エリクソン理論にみられる人間における歴史性に対する関心は、臨床的にはクライアントの家族の歴史的文化的遺産を含む社会的状況に目を向けさせただけでなく、20世紀前半におけるドイツのヒットラー、インドのガンジーの分析という文明批判をも刺激している。第三の特徴は、エリクソン自身が認めているように今日の時代を鋭敏に反映していることであろう。フロイトが無意識の存在を証明し、そのはたらきを示したが、エリクソンは個人が生活のなかでさまざまな困難に出会いながらもそれをのりこえ発達していくことを明示している。個人の異常性の発達を研究したフロイトに対して、エリクソンは個人的社会的危機が成長にとって有効にはたらくものであることを実証しようとしたのである。そこには楽観論的とさえみられうるような人間への信頼が投影されているということができよう。

人間発達は、生物学的、心理的および社会的諸事象について普遍的に経験される順序にもとづく進化的過程であって、そこには内在する自然発生的で偶発的な危機によってひきおこされる混乱をなおしていく自然治癒過程もまた含まれている。エリクソンによれば、発達の経過順序は、5段階の児童期と3段階の成年期によって構成される。エリクソンの人生初期の5発達段階は、フロイトの精神性欲的発達段階を拡大したものである。人間発達は漸成的順序にしたがう。漸成 (epigenesis) とは、あるものの上に生ずるという意味をもつが、

人間の発達はある段階の発達課題の達成の上に新しい段階へとすすんでいくと考えている。発達段階を考えるにあたって重要なことは、その段階に本来的な発達の課題を考慮に入れること、先行の諸段階と後続の諸段階との関連において把握すること、またそのひとの一生の生活史の一部としてとらえることである。

発達は連続的過程であるが、その発達段階は自我発達の予定表であると同時に、所与の社会状況の構造を反映しているものである。ひとは生物学的に、心理学的に、そして社会的にみて準備性がととのうと次の段階へと進むし、個人の準備性は社会の準備性に対応し、合致するだろう。たとえ一時的な後戻り現象（退行）が生じたとしても、それは発達の自然な副産物であり、自我の統合機能によって回復可能であると考えられる。この機能が避けることのできない不連続性を和らげ、段階間の連結をおしすすめるのである。しかしそれと同時に、いずれの発達段階にも対立し葛藤する二つの力が作用しあっており、自我はそれらを統合していかなければならない。この葛藤をうまく

解決していくことによって、いっそう進んだ成長が可能となる。だが、もしも解決に失敗したり、あるいは解決におびただしく遅れたりすれば、そのひとのもつ潜在的能力は失われ、発達が困難となり病理的諸現象が現われてくる。

かくてエリクソンは、人間の一生を八つの漸成的な発達段階に分けている（Erikson, 1963a, pp. 247—274）。人生周期（life cycle）の各段階にはその段階において解決しなければならない固有の発達の課題がある。その解決は前段階において準備され、その後の段階においてさらにすすんだ解決がなされる。各段階はその段階において到達しう解決の成功と失敗の両極端によって記述されるが、実際にはその結果は両極端の均衡なのである。たとえば、乳児期の発達課題は基本的信頼感を獲得し、基本的不信感を克服することであるが、信頼感だけを得ればよいというのではなくて信と不信のバランスが望ましいと考えている。つぎに、エリクソンの人間の八つの年代について簡約することにした。（表Ⅰ．参照）

表Ⅰ エリクソンの人間発達漸成論における作業仮説表

発達段階	精神＝社会的課題と危機	基本的徳目（活力）	重要関係の範囲	社会的秩序の関連要素	精神＝社会的モダリティ	精神＝性的段階（フロイト）
I	基本的信頼感と不信感	希望（のぞみ）	母 性	宇宙的秩序	得る、お返しに与える	口唇－呼吸器的、感覚－筋肉運動的（取り入れモード）
II	自律感と恥、疑感	意 志	親	「法と秩序」	保持する、放出する	肛門－尿道的筋肉的（把持－排泄的）
III	主導感と罪悪感	目 的	基本家族	理想の原型（手本本）	作る（求める）、「～のように作る」（あそび）	幼児－性的移動的（侵入－包含的）
IV	勤勉感と劣等感	適 格	「近隣」、学校	技術的要素（原則）	ものを作る（完成する）、ものを結びつける	「潜在期」
V	アイデンティティとその拡散	忠 誠	仲間集団・外集団リーダーシップのモデル	イデオロギー的展望	自然に振舞う（振舞えない）、活動を共有する	思 春 期
VI	親密感と孤独感	愛	友情、性愛、競争、協力の関係におけるパートナー	協力と競争のひな型（模範）	自分を他人のなかに失い、そして発見する	性 器 期
VII	生殖感と沈滞感	世 話（いづくしみ）	分業と家事の共有	教育と伝統の思潮	存在を作る、世話する	
VIII	統合感と落胆	英 知	「人類」「私流の」	知 恵	あるがままに存考する、非存在（死）に直面する	

第Ⅰ段階 乳児期（誕生から1歳半ころまで）

人生の最初の段階である乳児期は、フロイトの精神性欲的発達段階では口唇期である。エリクソンは、リビドー的快感帯としての口唇帯だけでなく、精神社会的な行動のあり方として、「受けること」、および「そのお返しとして与えること」に着目している。ひとは母性との関係において愛を与えられ、それにこたえることで相互にかかわりあうが、この時期の発達課題は、基本的信頼感の獲得と不信感の克服であるという。新生児は身体的安定と精神的安全を感じることによって、自分について信頼することができ、新しい経験が可能になる。しかし、不信感とは身体的精神的な不満足な経験から生じ、それは未来についてのおそれをつくりあげる。基本的信頼感こそ子どもをして精神的に成長させるはたらきをもち、よろこんで新しい経験を受けいれさせるものであるし、往々にして不信に直面せざるをえないような新しい経験に対しても期待をもたせることができる。そのうえ、子どもは自分自身の不信さえも信ずることを学ばなければならない。たとえば、はじめて食べる食物を口にすることを信ずることには、未知のものがもつ不信をふくんでいることになる。その子どもが信頼にみちた環境に生きているときには、彼は全体的な信と不信の均衡を維持することができる。

もしも子どもの生存にとって重要な母性的役割をもつひとが、彼の欲求に応ぜず、相互関連的行動を拒否しつづければ、彼は人間関係的な欲求の否認をはじめ、ついには自閉の世界に住まざるを得なくなるだろう。しかし一般には、母親との関係のなかで基本的信頼感を自分のものにすること

ができれば、彼は明日に希望をもつことができよう。エリクソンは、この段階で得られる人間の強さ（エリクソンは、それを「徳」(virtue)と呼ぶ）が、「希望」であると述べている。

第Ⅱ段階 幼児期（1歳半から4歳ころまで）

子どもは母親、環境および自分の生き方を信ずるようになると、彼は自分の行動が自分自身のものであることを発見しはじめる。この時期の精神社会的な発達の危機は自律感を獲得し、疑惑と恥の感情とたたかうことから生ずる。子どもは自分の自律性や独立性を確めようとするが、身体的社会的そして心理的にもまだ依存적であるために、自分の能力についての疑惑が生じたり、甘えてわがままな振舞うことに恥を感じやすいのである。とくに排便の訓練は社会的権威との最初の衝突をひきおこしやすいし、父母はその訓練において子どもに恥を感じさせることが少なくないのである。（この時期は、フロイトの肛門期にあたる）。

子どもが自律と恥・疑惑の関係のなかで自律感のほうがまさっていれば、「意思力」の徳を身につけることができると、エリクソンは考える。つまり、自己制御力の基礎がこの時期に形成されるのである。たとえば、恥・疑惑の経験をほとんどまったくしないですませた場合には、小児万能感のとりこになり、衝動的でわがままなひとがらになりやすいし、責任を引きうけることができないだろう。逆に、恥・疑惑の経験が相対的に多いときには、生涯を通して劣等感情になやみつづける可能性が生ずるにちがいない。

第Ⅲ段階 あそびの時期（3・4歳から5・6歳ころまで）

この段階はフロイトの男根期にあたる。それは、エディプス複合の時期でもある。エリクソンは、

このフロイトの考え方をさらにすすめて、行動の特徴を「作る」「求める」、とくに「～のようにする」というところにあるとし、移動性を重視している。この移動一性器期の発達課題は、自発性と罪悪感のバランスをとることにある。男子には侵入的活動が顕著となるが、エディプス複合の問題に直面し、超自我の形成がみられる。そして性器に向けられた関心が創造的な遊びへとすすみ、自発性の感情が獲得されてくる。女子にあっては、受動性への始動がみられ、母親の役割をまねる遊び（ままごと）が際立ってくるし、他者を自分の生活のなかに包みこもうとする傾向がみられる。

この時期に形成される人間的強さは、「目的をもつ」ということである。子どもは、遊びのなかで自分の目標をたて、それを遂行しようとする試行をくりかえすうちに、目標志向性が獲得される。

第Ⅳ段階 学童期（5、6歳から思春期のはじまるころまで）

フロイトが潜在期と呼んだこの時期は、小児性愛から成人性愛への過渡期として性愛的関心が背景に後退し、社会生活の基礎となることがらを自分のものとするために子どもたちが努力する段階である。エリクソンは、この段階の発達課題として勤勉感情を獲得し、劣等感情を克服することを強調している。7歳ころから11歳ころまでの子どもたちは、一方では熱心に学業に努力するが、他方では自分は子どもでまだ不完全であるということから劣等感にとらわれるおそれがある。勤勉と劣等という対立する感情をのりこえていく過程において、子どもは、社会人としての「適格性」を自分のものとしていくのである。

第Ⅴ段階 青年期（13歳～19歳ころまで）

おむね13歳になると、発達課題はアイデンテ

ィティ感情を自分のものとし、アイデンティティ拡散を克服することになる。ここでアイデンティティ（identity）とは人間に同一性と連続性を感じさせるもので、「私は誰か」「私はなにか」、「私はなにに成りうるか」という基本的な問いに対する答えを含んでいる。また、自我アイデンティティは、そのひとの身体的および精神的な自我の境界がはっきりしている程度をさし、その混乱のもっとも著しいのが精神分裂病ということができよう（アイデンティティの喪失が分裂病を特徴づける）。さらに、自己アイデンティティという場合は、誕生から青年期までにいたる各段階において形成されてきた社会的歴史的な自己観を統合し、自分のものにしていく力動的なパーソナリティの中核をさし、これがそのひとの人生における時間的空間的な変動をまとめあげる主体性（まさにそのひとりらしさを示すもの）を可能にするのである。

現代の青年に顕著にみられるアイデンティティの危機は、個人的同一性や生活史的連続性の感情の喪失によって生じ、彼が社会から期待されている役割を受けいれることができないか、あるいは自分のものとして取りいれることができない状態である。とくに、青年期は内的衝動が急激に増大するために内的不安定の状態にあわせて、急速な社会変動にともなって社会から期待される役割もまたはげしく変化するために、アイデンティティの危機が生ずる。社会からの承認を失ってしまった青年や社会の承認がもはや得られそうにないと思う若者は、社会的価値に反逆し、それを恨み憎しみ、それに対抗する悪に自分を同一化させ、陰画的アイデンティティを選択し、非行者、犯罪者、嗜癖者、性倒錯者の道を歩む。しかし、積極的・

肯定的なアイデンティティを確立することのできた青年に形成される人間的な強さは、「忠誠」であり、自らを信ずるものに献げることができるレディネスとなるだろう。

第Ⅵ段階 若い成人の時期 (20～30歳ぐらいまで)

青年期のおわりになると、ひとは自分のアイデンティティの問題を処理できるようになり、ほかのひととの関係をはっきりと自覚的にもつことができるようになる。この時期の課題は、親密感を獲得し、孤立感を回避することだと、エリクソンは述べている。ここで親密感というのは、自分のなにかを失いつつあるのではないかというおそれなしに、自分のアイデンティティとほかのだれかのアイデンティティとを融合する能力をいい、この親密さの発達が選ばれた結婚を可能にする。しかし、自己アイデンティティの形成が不完全であり、主体的行為ができないひとにあっては、他者とのアイデンティティを共有することができず、自分から関係を回避する傾向が著しくなる。

親密感と孤独との均衡のうえに、人間的活力としての「愛」が自分のものとなり、利己的でない本当の愛が具体化するだろう。

第Ⅶ段階 成人期 (30～65歳位まで)

成年期はいわば親となる時期であって、精神社会的な発達課題は生殖性 (generativity) と停滞にかかわるものである。ひとはおそらく一般社会のなかで自分の場所を占めるようになる。エリクソンが生殖性とよぶのは、世代から世代へと生きていくあらゆるもの、つまり子ども、生産物、観念、芸術品などを含めて社会が産みだすものすべてを発展させるように援助し、かつその責任をとるということを含意する。この生殖性に対するフ

ラストレーションは、ひとをして自分の世界に埋没させ、あるいは関心を喪失させることで発達停滞をひき起こしてしまうのである。親たちにとって、自分の子どもが生きていく意味があるという基本的信頼感 (第Ⅰ段階) を獲得するように、世話 (care) することが大切である。したがって、成年期の基本的活力は、「世話」である。

第Ⅷ段階 老年期 (65歳以上)

親として子どもを産み、若い世代を支え信ずることで、彼は自分の生涯についての統合感を発達させる。老年期には、この統合感の達成と絶望の回避が主要な人生的主題となる。自分の一生に絶望したり、子どもの世代を信頼できないときには、老年期のさまざまな精神的障害が生ずるだろう。この最終段階は、英知の時期でもあり、洞察にみちた「英知」がしばしば個人の生涯をこえて新しい世代の未来に直接かわりをもつのである。

Ⅵ 人間発達学の構想

人間発達に関する漸成の原則は、各段階または年代が特徴的な危機をはらむ人生的課題をもつことを前提とし、人間がそれに直面し、それを持ちこえて発達していくことを仮定している。エリクソンはとくに、精神社会的なパーソナリティの危機を主要な関心事として臨床的な事例研究を深め、理論を構成している。

人間らしさを規定する重要な中核として、パーソナリティの発達を定式化する場合であっても、身体の構造と機能におけるホメオスタティックなシステム、一次集団の相互作用のシステムおよび制度的集団との関係のシステムを合わせて考察して

いかなければならない。これらの諸システムとパーソナリティの交互作用の力動性および機能的相補性に着眼点を置き、エリクソン理論を拡大し、充実させることによって、人間発達学はいつそう前進すると考えている。

たとえば、高年齢期（一般に65歳以上）へのアプローチは通例として、感覚機能の減退、老化した身体構造といった生理解剖学的システムの問題であり、核家族化に伴って子どもの家族から孤立化するという集団のシステムの問題、あるいは60～65歳の間に制度的社会（職場）からの退役あるいは後退によって生ずる社会のシステム上の現象として取り扱われやすい。各システムは相互関連的であるから、いずれも見のがすことはできない。

しかし、老いた人の理解にとってもっとも重要なことは、その人のパーソナリティのシステムに関するものである。すなわち、アイデンティティの問題である。老いという新しい場面で、これまでの自分と一貫性および連続性をもつ新しい自己観を形成できるかどうかの問いである。身体の変化、社会からの後退といった現実を受け入れ、自分の生涯の総括への意欲によって、自分を見直し、パーソナリティを再構成することができれば、次の世代を信頼することができるようになるし、英知を示すことも可能となる。しかし、他のシステムの機能低下をくやみ、奪取されたと思いこむようになれば、その人は失意と挫折の終局を迎えざるを得ないだろう。このように、人間発達の中核は、パーソナリティにあり、自分は何かを見定め、受け入れることが基本になるわけである。

おわりに、以上の考察を手がかりに人間発達学を定式化しようとすれば、次のような内容になる

と考えられるので、その概要を摘記することにした。

1. 人間発達学の課題
2. 人間発達段階論（本稿）
3. 発達研究の方法論
4. 基本的要因（遺伝、資質、環境—地理的、家族、仲間、学校、社会、文化など）
5. 誕生前の成長と誕生のとき
6. 幼児初期（0歳～1歳半）
6. 幼児期（1歳半～4歳）
8. 児童初期（3, 4歳～5, 6歳）
9. 児童期（5, 6歳～12, 13歳）
10. 青年期（12, 13歳～19, 20歳）
11. 成人初期（20歳～30歳）
12. 成人期（30歳～50歳）
13. 老年初期（50歳～65歳）
14. 老年期と死の時（65歳～）
15. 人間発達における世代の循環

ただし、年齢についてはひとつの目安を示したもので、いわば指標である。エリクソン理論に含まれていない出生以前の時期を加え、さらに同理論では一括されている老年期を2つに分けたのは異なる発達課題があると想定されるからである。老年初期はいわゆる更年期であり、青年期と同様にアイデンティティの問題が前面に出るが、老年期は死との関連がいつそう重要になっている。

参 考 文 献

1. 安倍三郎：新児童心理学 協同出版 1954
2. エヴァンス（岡堂哲雄・中園正身訳）：
エリクソンとの対話 金沢文庫 1971
3. 石田恒好：発達心理学 協同出版 1968
4. 北村晴朗：人間形成の心理 協同出版1968
5. 岡堂哲雄：基礎臨床心理学（改訂増補版）
萩書房 1971
6. 岡堂哲雄：家族関係の臨床心理 新書館
1967
7. オルポート（今田恵監訳）：人格心理学上下
誠信書房 1968
8. 武田 建：保育・保健・福祉のための人格発
達論 ナカニシヤ 1972
9. Erikson E. H. : Childhood and Society
(2nd ed) N. Y. Norton, 1964
10. Lidz Th. : The Person—his development
through the life cycle. N. Y. Basic Book 1968
11. Lowe G. R. : The Growth of Personality
—from infancy to old age. Penguin Book 1972
12. Maier H. W. : Three Theories of Child
Development. Harper, 1965
13. Pikunas J. : Human Development—a science
of growth. N. Y. McGraw-Hill 1969

An Introduction to a Science of Human Development.

Tetsuo Okado

Research of human development has progressed rapidly in areas of both theoretical systems and experimental findings during recent decades. Researchers' interest and efforts mainly focusing on childhood and adolescence have been gradually extended to adulthood and senescence — the often neglected stages of human life cycle.

An attempt to show the whole of human development in the total environment can be done with the converging contributions from psychology, biology, medicine, education, and sociology. The author thinks that it comes the time to establish tentatively a science of human development.

In this paper how and what a science of human development will be integrated are discussed enough, and then suggested that Erikson's epigenetic theory of human development seems to be the core of the new theoretical frame of reference, even though it should be added the prenatal phase and divided the senescence into two phases — the climacteric and the ordinary senescent phase. It appears, also, to be a major guide to dynamic studies and formations of personality functioning and development.

The concluding remarks include a new guide line too construct a scientific theory of human development.